臨床学的発達論の構築に向けて（第7報）
——「いじめに遭っていると母親が訴える年中児の担任への援助の場合——

角 田 春 高
（愛知県立保育専門学校）

Ⅰ はじめに
「いじめ」を初め「気になる子」の保育に頭を痛めている保育者に、実践援助として、理論的に、どのように応えたらよいのだろうか。

筆者は保育・教育モデルに沿う「臨床学的発達論」を構築して、これに応える実践活動をしてきた。本稿では、副題に示す子どもとその母親に取組む援助に対し、「二段階人格形成」による子どもの「育ちの見立て」とその未達成段階へのかかわり方および母親指導への援助経過を報告し、若干の考察を加える。

Ⅱ 「臨床学的発達論」の概要と援助の手続き
「臨床学的発達論」は、乳幼児から老人までの心の相談援助活動を、すなわち育ち直しがいった人たちと本来育っている人の共通点と相違点を結び、筆者が独自に構築したものです。これで子どもを観るとときには、「あるか」かにかわらず、「今」の人格の形成段階に注目する。

子どもが大人になるとき、7段階をくり返して人格形成を達成（二段階人格形成）することであり、そのためには「感情、行動、意志」を「代弁や自己表現」する「やりとり」をすることである。

その7段階とは、次のようなものである。

1段階、生きている実感を持つ。2段階、物や場所による安心感の広がり。3段階、人による安心感の広がり。4段階、おりがえ、おはがき、おはがきを食べる。
5段階、対人は二人遊び。6段階、対等な三人遊び。7段階、学習（勤務）意欲を持つ。

いじめを含め「気になる子」を見立てることは、気になる現象の形成過程や現象のタイプ等に注目するのではなく、子どもがどの段階まで育ってきているか、どの段階が不確かであるかを見立てようとする。そして、不確かな段階を指すように「やりとり」する傾向にある。人格の形成が達成されていくのにしたがって、気になる現象は減弱され、引き続いて人格の形成に取り組むのである。

援助の手続きは、毎月開催される「保育・教育事例研究会」で、保母の実践を、1回1時間ほどだけで検討する。これを5回（4ヵ月間）繰返した。

Ⅲ 取組みの展開
1、事例の概要（担任による報告から）

【家族構成】 祖父方曾祖母、母方祖父母、両親、兄（小2）とA男（年中児）の4世代7人家族。
【保育歴】 3年保育の2年目である。
【検討のきっかけ】 保母が担任になった5ヵ月前に母親から寄せられた訴えが耳に残っていることによる。

今後の理解は、年少のときから友達をうまくかわらなかったA男であったが、母親の言うようにA男がいじめられているかは受取れない。A男がいじめられているか否かを具体的に考えたい。

2、実践と検討の概要
【第1回目】 （担任の説明）
母親によると、母親にはA男は他の彼をやりたいといるし、家で遊ぶときもいじめられやすいわに、児童がいる。
保育園（以下園長と表記）でのごっこ遊びでは怪獣役をやっており、母親の訴えもあり保母が他の彼をやるようにA男に声をかけても怪獣役をしていた。

また、友達と遊んでいて、自分の思うように行かないときに「いじめられた」と訴えてくることがある。

A男は製作が苦手であるが、個別にかかわると仕上けることができる。A男の作品を見た母親は、A男が仕上げたことを認めず、担任が事業を説明してもA男の努力を否定する。

他に、自分の思いに弱いの、将来何になりたいかを聞いても答えられない。

【援助内容】
A男は、第4段階が不確かであろう。
母親にはどのように言っているのか、A男に確かめたり、A男の内面を具体的に「代弁」すること。
母親との会話から母親自身が第4段階が不確かではないか。母親に具体的なかかわり方を説明すること。

【担任の感想】
A男も母親も自分の理解の仕方やかかわり方が大きったのであった。援助を手がかりに確かめてみたい。

【第2回目】 （担任の説明）
ぬりえ製作では他に譲ってばかりのために仕上がりが遅れるが、個別にかかわるしっかり仕上げる友達との遊びから離れたとき、すぐにA男とやり
りしたら「いじめ」の訴えがなかった。

エプロン縫いではA男のできないところを担任は援助し、母親に具体的に説明したところ、母親もかわったようで一人できるようになった。

（援助内容）

前回の見立てが適切であった。保母の実践内容を支持し、感謝を聞く。

（担任の感想）

よく話を聞くことが大切と実感できた。次回は、友人関係の中でのA男の言動を観察。

【第3回目】（担任の説明）

運動会に向けてのかけっこ練習場面で、A男の思いを代弁するようにしたところ、A男は運動会後に「入れ」「貸して」と言ったり、譲ったり譲ってもらったが、担任に助けを求めたようになった。

映の主役をA男にやらせてもらいたいと母親から申し出があり、その対応に内困っている。

（援助内容）

A男は、第4段階から第5段階へ移行する。2歳半過ぎの姿が見え隠れて。

母親とのやりとりから母親も第4段階不確かなところ、少なくとも第5段階の対等な二人遊びができるまでないと見立てる。

映の主役については、担任の方針を伝え、母親の期待に添えるところと添えないところのあることを提示していくこと。

（担任の感想）

母親の希望は聞き流していた感があるので、自分の方針も折を見て伝える。

A男から話しかけてくるようになったが、A男の気持ちを確かめておきたい。

【第4回目】（担任の説明）

配役の決定まで希望の役をやせる中で、A男は家来の役がよい、という。しかし、それを言うと母親には叱られるので、A男が困っていると判断。A男の気持ちを大事にして、母親が怒った担任が話をすることをA男に約束した。A男によると自分で母親に言ったが、母親は怒らなかったとのこと。

仲の良い子ができて、友人の中でもトラブルを起こすことがなくなった。大勢での集団遊びも担任の仲立ちで続くようになった。

母親と話すが、配役のことを通して話に出ない。担任が隣のクラスの子と遊んでいないことA男に言っているが、隣のクラスの保母に訴えた。その保母はそのようなことはないと母親に返事したことが担任の耳に入った。

（援助内容）

担任の取り組みを全面的に支持する。

A男は仲良しを求めて周囲に動きかけている。仲良しが増えた後、「対等な三人遊び」の課題に取り組むことになる。

母親は第4段階が未完成であると言える。

（担任の感想）

担任となってから母親から訴えがあったときには、どこから手をつけて良いのか分からなかったが、しっかり気持ちを聴くことで道の開けることが分かった。また、A男がかなり成長した。

A男だけでなく、他の子どもへも応用ができ、予想外の展開になっている。

母親にも具体的内容のある指導が必要であった分かった。

【第5回目】（その後の報告）

A男が離れて登園し、担任に叱られたと母親に報告したので、母親から会面があった。いきさつを説明したら母親は納得。当日のことを心配した母親であったが、A男を含め全員が活況に選出。母親が初め家族も喜び、A男は母親に苦渋されたとのこと。

その後母親からは「いじめ」と言う言葉が出ていなくて、次の課題達成への期待表明があった。

IV 全体の考察
「いじめ」の面から保育に悩む担任に対して、「臨床的発達論」による援助事例を報告した。この場合「いじめ」か「いじめ的」であるかではなく、A男の人格の形成段階（育ち）を見立て、それが確かにこれから手応えの得られる展開が始まった。

また、母親も「二段階人格形成」で見立てたが、直ぐに母親がかわるのではない、最後に話し合うことになる展開での指導となった。

さらに、担任の事例理解と取組みからいって、この担任は少なくとも対等な二人遊びのできる人であったために、早く展開していたと考える。

文 献

平井・本吉(1996)：「いじめ」と幼児期の子育て, 麴林書林

角田春高(1994)、(1995)：臨床の知「育て直し法」とその特徴, (21)、(22) 本校研究紀要13、14号